

# 作曲少女

《番外編》

何も続かない私が  
作曲をしようと思ったきっかけの話

仰木日向  
イヌド  
まつだひかり



「……この前の詩集のノート、すごかったなあ」

ちよつと冷えこむようになってきた冬の足音の聞こえる秋の放課後。学校の中庭でベンチに座っている私は、ちよつと途方に暮れている。

——見た目は普通、頭脳も普通、『平凡』を辞書で引いたら私の写真が載ってるんじゃないかと思うほどのド普通を生きる私こと山波やまなみいろはは、そのあまりにも普通な毎日によつぱり満足するわけでもなく、今日も今日とて青春の時間と体力を捨て余している。

「……詩ってどうやって書くんだろう」

色んなことに挑戦しては挫折しての繰り返し、私。お料理も漫画もスポーツも続かなかつたけど、そんな毎日の中で私は先日、ひよんなことであるノートを見た。

——それは、『ココロノート』と書かれた誰かの詩集ノート。中には沢山の詩がビッシリ書いてあって、その熱量というか、圧みたいなものに私は、言い知れない迫力を感じた。

何をやっても続かない私だけど、そういえばまだやってなかつた詩。または作詞。作曲とかはやる前からもう手に負えないのがわかり切つてから、さすがに手を出すつもりはないけど、作詞だけならなんとかやれるんじゃないかなと思つたりしている。……つていう感じで昨日、ちよつと詩を書いてみようとしたんだけど、それも全然上手く出来なくて途方に暮れている。

「あのノートの人、誰だか知らないけどあんなに沢山の詩を書けるつて、すごい才能だなあ。すごくロマンチックで良かったし……」

クラスの人でああいうのバカにする人もいたけど、私は素直に凄いと思う。だって、あんなの書けないよ普通。やってみてなおさら思うけど、あれはぎつとすごいことだと思う。

「はあ……なんでもいいからハマりたいなあ……  
なんで私ってなんにも続かないんだらう……」

中庭にまで届く、放課後の部活の声や音。野球部の人のハキハキした様子や、ストレッチをする新体操部の人たちの楽しい声。どこからか聴こえてくる吹奏楽部の楽器の音。みんなすごいね本当。私もそういうことできたらいいなとは思うけど、やっぱりどうしても続かないし、手に入らない種類の遠い憧れに感じてしまう。

……部活だつてホントはやりたかつたんだけど、でも、ダメなんだ。向いてないんだそういうの。お料理部は我慢して続けようかとも思ったけど、しんどくなつて辞めちゃった。その時のことを思い出したたびに、何度も何度も自己嫌悪してしまう。私は本当に我慢が足りない。何も続かない人なんだつて。

「……吹奏楽部に入るとか。……ないよね。無理。」

音楽とかやったことないし」

中庭に反響するトランペットの音色。どこで吹いてるんだらうと思つて周りを見渡すと、渡り廊下のところに吹いてる人がいた。気持ち良さそうだなあ。開放感のあるところで空に向かってトランペットかあ。いいなあ。ああいうの憧れるなあ。……まあ、向いてないよね。どうせしんどくなつて辞めちゃうつて、わかつてるんだから。

「……ん？」

見間違いかと思つたけど、やっぱりそうだ。屋上に誰がいる。屋上つて立ち入り禁止だよ？でも確かに、屋上のフェンスに腕を置いて空を見てる生徒がいる……？

「今日つて屋上開いてるのかな？　なんかそういう特別な行事とかあるの？」

\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*

……と、気になつてつい屋上に足を運んだ私。  
「……開いてる？」

いつも鍵がかかつてるはずの屋上の鉄の扉は、開いていた。重い扉を押すと、見慣れない屋上の景色が広がり、ちよつとドラマチックな気分になる。

「すごい……。こういう景色なんだ……」

あ、でも勝手に入つたら怒られるよね。戻ろのかな……。さつき屋上にいた人は何部の人なんだろう？ 屋上に入入りできるつて、生徒会の人とかかな？

……と、思っているところで、私はさつきの人影を見つけた。すいません、と声をかけようと思つたその時、むきつけの敵意を含めた声で――。

「――何をしに来た？」

「え……」

「お……？ この声は……アタシの知ってるやつ  
の声じゃないな。アタシはてつきり、いや」

振り返つたのは、銀色のショートカットに赤い一筋のメッシュが入つた、鋭い目つきの、背の低い女子生徒だつた。屋上に吹き抜ける秋風がビュウと吹き、髪とスカートをなびかせる。驚くほど厚い厚底のスニーカーを履いている足元はなぜか異様にドッシリとしていて、まるで地面に根を張つてるかのような重々しい印象だつた。

「お前誰だ。ここに何の用だ」

「あ、いえ、すいません、まちがえました、あ、すぐ、かえます。はは……」

これは間違いなくコワイ人だ。うちの高校は平和な方だと思つてたけど、こういう不良っぽい人もいるんだね……。

そそくさと屋上を去ろうとすると、コワイ人は後ろから声をかけてくる。

「なあお前、ちよつとこつち来いよ」

「あ、あ、すいません、あの、ちよつと、用事が、ありまして……えへへ」

「すぐ済むから、待って。こっちきて座れよ」  
 あ、やばい。終わった。これ私、死ぬかも。ど  
 うしよう。逃げられない……。

「なにをオドオドしてるんだ。いいから、ちよつ  
 と話でもしようぜ。アタシはいま、誰でもいいか  
 ら会話したい気分なんだ」

ああ、だったら別の誰かにしてほしい……。

「……ハア。まあ、無理には言わねえけど。そ  
 の様子じゃお前、アタシの見た目ですっかり引い  
 てるようだしな。いいよ。帰んな2年生」  
 「……………」

こう言われると、ちよつと考えてしまう。見た  
 目はたしかにかなり攻撃的な感じだけど、コワイ  
 人はこういう気遣いみたいなことは言わないんじ  
 やないかな……？

「あの……私、面白いこととか話せないですけど」  
 「普通のやつ普通の話が聞きたいんだ。あのと  
 きアタシはどうすれば正解だったのか、そのヒン  
 トを探してる」

「……………」

「気にするな。なんでもいいからお前の話を聞か  
 せてくれ」

\*く\*く\*く\*く\*く\*

「……なるほどな、何をやっても続かない、か」  
 「はい。そういう自分が好きじゃなくて……でも、  
 何かをやってもまた同じことになりそうで……」

人を見た目で判断しちゃダメだつてよく言うけ  
 ど、やっぱりそうだね。話してみるとこのギャル  
 先輩（どうやらこの人は3年生みたいだった）は、  
 コワイのは見た目だけで話してみるとフレンドリ  
 ーな人だった。っていうか、ギャルの人ってコワ  
 い感じするけど実はこういうパターン多い気がす  
 る。実はすごい情に熱いっていうか。

「別にいいじゃねえか。続かなくても」

「でも、続かないってダメな人っぽいじゃないですか？」

「例えば魚が陸で生活しようとして続かなかったとして、お前はその魚をダメな魚だと思うか？」

「いや、それは無理があるだけかと……」

「それと同じ話だよ。お前にとって無理があったから続かなかつただけのことだ。ダメとかじゃない」

「……なるほど？」

「魚だつて陸に憧れることはあるし、空に憧れることもある。無理して我慢して、やつとのことで陸や空で生きることが出来る魚もたまにいるが、そいつがなんらかの我慢をしてそこにいるかぎり、そんなものは続かないんだよ。陸にいることが自然なやつもいるし、空にいることが自然なやつもいる。お前がもし魚なら、海を退屈に感じたとしても海で生きるのが自然だし、自然な中に自分の居場所ってのはあるもんだ。憧れは、挑むものはあれど生涯の居場所じゃあない」

あ、なんだろうこの人。良い人かも？ つていうのとはちよつと違うかな。女子高生にしては変に達観してるとつていうか……仙人みたいいな……。

「やつてみりゃいいじゃねえか。挑む楽しさはただそれだけで楽しいもんだ。出来なかつたらそれでいい。気楽にやれよ。もし楽しくやれたら、それはもしかしたらお前の居場所なのかもしれねえしな」

「はい♪ 先輩つていい人ですね！ なんかやる気出てきました！」

「そりゃ結構なことだ。どんどんやりやあい」  
「実はいま、作詞をやつてみたいと思つてるんです♪ 作曲できたらいいなつて思つてたんですけど、それはちよつと敷居高いし、作詞くらいなら出来るかなつて思つたりして♪」

「……………」

「……………あれ？ 先輩？」

「屈託のない笑顔でまあ。楽しそうで何よりだ」

「はい！ やってみます」

一瞬流れた沈黙に、私は少し違和感を覚えつつ、先輩の顔を見てみると、何か言いたげな様子だった。

「……なあ2年生、作詞もいいけど、作曲がやりたいなら作曲したらどうだ？」

「作曲？ あはは、無理ですよ」

「やってみるくらいいいだろ？」

「でも私、音楽やったことありませんし……」

「だからこそいいんじゃないか。考えてみるよ、まったく知らない世界に飛び込むんだぞ？ できるかどうかは全然わからない、真つ白な地図だ。ほら、ワクワクしてこないか？」

「そう言われてみれば……なるほど、たしかに」

「出来そうだから、なんて理由で選ぶのはつまんねーだろ。『楽しそうだから』で選ぶんだ。お前は、本当は作曲の方が楽しそうだと思うたんだろ？」

「だったら楽しそうな方を正直に選べ。簡単そうだから作詞を選ぶなんて、楽しくなさそうだろ？」

「……まあ、そういうところもありますけど」

「出来なきや出来ないほど楽しいってくらい、もともと無理なことに飛び込むのもオツなもんだ。」

ムツカシーなあ、アハハって感じだよ」

「……………でも」

出来ないに決まってることをやるって、やっぱり無茶だよそれは。考えようによってはたしかにこの先輩の言うような楽しさだってあるんだろうけど……。

「変に気にするよな、お前らはさ。別にいいんじゃないのか？ 下手でも」

「…………？」

「お前が何をやっても続かない理由を教えてくださいなうか」

「え………そんなのわかるんですか？」

「5分も喋りやそれくらいわかるよ。お前、ちゃんと出来なきやダメだ」と思ってたんだろ」

「……………まあ、はい」

「出来なかつたら出来なかつたでいいんだよ。そ

したらまた別のもので遊べばいい。目の前に何十種類というオモチャがあるって考えてみる。プラモデルが好きなやつもあればクレヨンで絵を描くのが好きなやつもいるし、人形遊びが好きなやつだっているし、外に出て砂場で遊ぶのが楽しいってやつもいるし缶蹴りが好きってやつもいる。逆に、それらを楽しいと思わないやつだっている。無理に続ける理由なんでもとないだろ。好きな遊びが見つかるまで、取っ替え引っ替えどんどん触って探していけばいいんだ」

「……はあ」

「何かを作る遊びがもし気に入ったとしてだ。出来上がったものなんてオマケなんだよ。作ってる連中のほとんどは、出来上がったものを自慢することより作ってる途中が楽しくてやってるんだ」

「そういうものなんですかね……?」

「作曲をやってみたいと思つたなら、やってみる理由なんてそれで十分じゃねえか。上手に出来るかどうかなんて、考えるなよ。誰かにガタガタ言われても放っておけ。お前が楽しく作ってる、そ

の時間に価値があるんだ」

「それは、そうかもしれないですね。……そうですね！ 私、やってみたくなってきました！」

「はは。未知の領域に踏み込めよ作曲少女！ できてもできなくても、その道行きのすべてに人生の遊びがある。周りからつまんねーこと言われても気にするな。遊び尽くす心をまっすぐぶつけりや、それだけで大体のことは楽しいんだ」

\*~\*~\*~\*~\*~\*

「なんか、私の話ばかり聞いてもらってすみません。先輩はなにか話したいこととかないんですか?」

「ないね。っていうか、これで十分だ。助かったよ2年生。いろいろ勉強になった」

「……? そうですか?」

「『他人とは、自分の人生を磨きあげる触媒である』ってな。岡本太郎の言葉だ。アタシだけでアタシが磨かれるなんてことはない。こうやって、

どうってことない話をするこの時間だけで十分なんだよ。お互い、名前すら知らなくてもな」

「……はあ」

「じゃあな2年生。アタシはもう帰る。たぶん、もう会うこともないだろうが、また会ったらそんなときは、お前の楽しい何かの話でも聞かせてくれよ」

「あ、先輩！ 名前なんて言うんですか？ 私は

2年2組の——」

「知らねー知らねー。興味もねえ。またな2年生」  
「……………」

ガチャン、と屋上の扉が重い音を立てて閉まる。屋上に残された私は、こだまする部活動の音をまた聴きながら、広いグラウンドを見つめていた。

\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*

ギヤル先輩とは、あれから二度と会えていない。あんなに目立つ見た目ののに、学校の中で見かけることは結局一回もなかった。秋の放課後に突然吹き抜けた一陣の突風のようなギヤル先輩は、もしかしたら私が見たりアルな夢だったんじゃないかとすら、ちよつと思ったり。

……でも、そのたつた一度だけの、たつた数分の出会いは、その後の私の人生を少しだけ変えるものだったのかもしれない。少なくとも、次のチャレンジをするきっかけとしては——。

「すみません、これください！」

私は、中古のキーボードと作曲の本を買った。私がワクワクする、私の居場所を探して。

# あとがき

このお話は『作曲少女』と『作詞少女』の両方を読んでくださった方じゃないとピンとこないかもしれないお話ですが、わざわざコミティアに来てくださった上でこれを手に取ってくださる方におかれましては（別にそういうこと気にしなくてもいいかな…？）と思い、甘えつつ、書きたいのをただ書かせていただきました（´v`\*）本シリーズを知らずになんとなくこのコピ本を手に取った方、または片方だけを読んでこれを手に取った方には意味の通じない話もあったかもしれませんが、もしよければそれぞれの物語もまた楽しんでいただければ幸いです。

"もし、いろはと詩文が出会ったら…"の話、物語上ほぼ接点のない二人なだけにこれを書くことはないかと思っていましたが、今回はちょうど良い機会をみつけることが出来てよかったです。書いててすごく楽しい二人のやりとりでした！

あと、今回も超絶素敵なイラストを描いてくださったまつだひかりさん、突然これを出すのにも俊敏に対応してくださった編集Kさん、いつもありがとうございます！ 仰木日向

（´w`）.oO(珠美と詩文が出会ったらどうなるのか…)